

# 短大教育における図書館の活用

## Effective Use of Libraries in Junior College Education

井上 誠 治

Seiji Inoue

### Abstract

In junior college education, it is particularly desirable to make the students utilize the library in order to promote the autonomous study and independent research of the students. To promote the utilization of the library by the students the library has to be something that the students can rely on. For the purpose the teacheres should be concerned in the selection of books. Also by obtaining the data on the actual use of the library by the students with the use of computers, it will be possible to make appropriate selection of books and thus ideal utilization of the library by the students.

### 1 はじめに

短期大学が専門の学芸を教授研究し、職業や實際生活に必要な能力を育成することを目的とするなかで、図書館はその目的にそって、教室内の学習に対して教室外の自主的な学習、研究活動に加え、広く読書等を通して、全人的な人間形成を目指す役割をもつもので、どちらかといえば受動的な教室内の学習に対して、能動的な学習、研究を身につける機関が図書館であるともいえる。日々変化の激しい今日において、社会に巣立っても自主的な学習を通して、自分なりに物を見、考える能力を養うことは大事なことである。

### 2 最近の短大図書館動向

いちがいに図書館といっても、公共図書館あり、大学図書館あり、短大図書館あり、高専図書館あり、学校図書館あり、専門図書館など種々のものがあって、各々は利用対象に応じて、さまざまなテーマに取り組んでいる。同じ短大図書館でも蔵書数や学生数で、大学により相当の差がある。例えば、83年の「日本の図書館」によれば蔵書数で11.1万冊から0.8万冊まで、学生数で3,380人から100人未満の大学まで千差万別なので、その活動も種々あるものと思う。

かかる状況の下で、年に1回開催されている全国図書館大会における短大会のテーマが、世の関心の最大公約数的な問題である。このテーマの推移を最近数年間にわたり、とりあげると次の様なものである。

全国図書館大会における短大会テーマの推移

表1

S.55年度	80年代の短期大学図書館を考える	S.58年度	図書館サービスの展開と充実 —利用指導へのアプローチ—
S.56年度	短期大学図書館の近代化をめざして —相互協力の推進・業務の機械化—	S.59年度	相互協力網を作るために —今すべきこと、できること—
S.57年度	利用教育の現状と課題	S.60年度	短期大学（含高専）における教育の 現状と図書館の在り方

これをみる限り、最近の数年間では図書館の利用指導、利用教育に関するテーマが多い様である。事実このテーマに関連する論文も多い<sup>1)2)3)4)5)</sup>。

利用指導、利用教育とは文字通り、図書館の本来の使命を全うするための図書館資料の利用、活用についての指導、教育である。更に一步踏みこんで、図書館資料を自分なりに利用、活用する能力を育成することを目指しているともいわれている。この自主的な学習、研究能力の育成は短大教育の目的に包含されるもので、その動機づけは非常に大切なことである。しかし、本来、図書館の利用指導や利用教育は中学校、高等学校までに行われるべきものである。同年令層の37.8% (S.60年度)が大学の門をくぐっている現状からすれば、選ばれ、恵まれた短大生に一応の利用指導、利用教育はよいとしても過保護的な利用指導、利用教育は教育効果上も好ましくないと思うし、自主的な学習、研究能力を育成する線にはそわないことである。

次に、59年度のテーマは膨張する情報資料に対し、特に学術情報資料など各館の収書には限界があるので、今後は相互協力網を作って利用者のニーズに対応しなくてはならず、現時点と今後の取組みについて討議したもの。この相互協力については大学部会で、次に示す様に、数年来、テーマにとりあげ検討されている。

全国図書館大会における大学部会テーマの推移

表2

S.55年度	大学図書館間相互協力の推進	S.59年度	大学図書館ネットワークの基盤整備 のために —収書における相互協力—
S.56年度	学術情報システムと大学図書館		
S.57年度	新しい大学図書館へのアプローチ	S.60年度	大学図書館ネットワークの基盤整備 のために —地域協力と専門分野別協力—
S.58年度	新しい大学図書館へのアプローチ —学術情報流通と収書—		

### 3 短大教育における図書館の活用

短大教育においては教師より学生へテーマが与えられ、学生はそのテーマについて、教師の指

導をうけながらまとめあげ、その課程で学習研究する能力が養成されることが望ましい姿であり、その端的なものが卒論である。

短大教育、なかでも一般教育ではかかる Two way 教育が時間的な制約で、一方交通的に教授することで、その教科が終了することもありうる。かかる場合、自主的な学習、研究に図書館の利用、活用を期待したい。この場合、問題は図書館が教師にとって、或いは学生にとって信頼できるものであるか否かである。信頼性ある図書館とは、利用者にとって必要な資料が、十分に揃っていることが第一である。

### 3-1 図書の選択（収書）

短大図書館としての機能は大きく分けて3点あるといわれている<sup>6)</sup>。

①資料の提供 ②学生、教職員への援助（利用者への援助） ③施設、設備の提供 ここで、一番重要なことは①の点である。図書館にとって、この資料が的確に、スピーディに利用者へ提供できるか否かが問題である。また、若し万一直ちに提供できないときは、次のステップとして、機能の②の点である希望する資料の存在を調査し、資料の購入や他館の利用など利用者を支援することが必要である。これらの対応如何が利用者に図書館を信頼させることになる。これら一連の図書館サイドの対応のなかで、基本的に収書の役割が最も大きく、その中心は教師がになうべきものである。というのも教師は担当分野において、熟知しており、また自己のカリキュラムを補強する教材、或いは派生する問題などについて包括的に把握している。従って、担当分野に関係する学習図書、教養図書、或いは研究図書などの選択について、自主的な学習をさせる動機づけとの関連で、図書館をリードできるし、またすべきである。勿論、現行の本学図書選択システムは教師中心の方針のもとに運営されており、今後も変わることはない。

### 3-2 図書館資料の利用把握

今日の情報社会において、極端な言い方かもしれないが、図書館ほど利用実体が把握されていないものは少ないのではないだろうか。というのも、把握するのに相当の労力と時間を要するためである。今日、大学生はテレビ、ラジオ、新聞、書籍など多様な情報メディアに対して巧みに付き合っているといわれている<sup>7)</sup>。昨年、全国大学生生活協同組合連合会が「大学生の読書生活」として調査した内容をみると、テレビを見る時間104分、ラジオを聴く時間60分、読書56分、マンガ、雑誌31分、新聞27分と多様である。かような状況の下で、図書館の利用実体の把握は旧態然としているように思える。図書館の資料とマスプロの製品とでは趣を異にするが、今日ではマスプロ製品が、その型式と販売量、ならびに卸店級の粗いメッシュながら販売先まで、タイムリーに把握され、在庫量をみながら次の生産に反映し、あわせて、製品のクレーム状況なども、その内容、部品名、頻度など把握され、内容と頻度によっては即刻、設計改良に反映されている。これら把握された情報はタイムリーにフィードバックされるから、生きた情報として利用されるわけで、時宜を失すれば把握されても単なる情報にしかかなりえない。図書館の場合でも同じことがいえるわけで、図書館情報について、一寸考えただけでも次の様なものが把握できればと思う。

①貸出書籍、冊数は貸出カードを見れば分るが、その分野別、個別の月別、期別利用状況、利用頻度などはなかなか把握しにくい。

②館内の閲覧傾向は分らない。短大図書館では開架書庫が多いので、なおさらである。

- ③感銘をうけ、参考になった資料、物足りないなど利用者にとっての満足度は分らない。
  - ④指定図書は利用されているか、その利用頻度はどうかなど簡単には分らない。
- 次に、図書館として、よりよい運営に関連したデータとしては次の様なものがあげられる。
- ⑤利用に対して、蔵書構成が適切であるかなどの調査には相当の労力を要し、実体の把握が容易でない。勿論、収書方針のもとに利用頻度に関係なく蔵書される場合は別である。
  - ⑥図書受入れと利用実体を把握し、受入図書の調整をタイムリーに行うことは容易でない。
  - ⑦1日の入館者総数は分っているても、その時間と入館者数は分りにくい。

教師にとって、その教科の関連図書の利用実体が容易に把握されると、自己の教育に反映することもできるし、学生への自主的学習に動機づけを行うことにも利用でき、教育効果をあげる上で有効であるが、現状は把握が容易でない。

これら山積した問題はコンピュータを利用すれば比較的容易に解決できる。蔵書数10万冊以下であればパソコンでも図書館の事務機械化は可能であるといわれている。また、図書館内における閲覧状況の把握で、読書のプライバシー保護を当然考えなくては行けないが、単に専攻学科名と書名が分れば利用状況と頻度把握は十分である。最近では携帯型のバーコードリーダーなどもあるので、これを閲覧室に設置しておけば、開架書庫より持出した時に、各自簡単な操作でインプットできる。パソコンへのインプットは図書館員がバーコードリーダーをパソコンに接続すれば自動的にインプットされる。また利用者にとっての満足度でも、予め設定した項目をキーインプットするなどシステム設計時に工夫すれば、真に有効な事務機械化が可能である。

これらの事務機械化で、書籍個々の、或いは分野別の利用実体が把握され、教育への反映、学生への動機づけ、或いは図書選択への反映等ができる。教師による有効な図書選択は図書館の充実と信頼性につながり、教育上有効な一連のループが形成されていくだろう。

#### 4 本学における図書館に関するアンケート

今回、図書館に関するアンケートを表3による内容で実施。本来、全学生にすべきところを、2年生については数学受講者、1年生については図学受講者に実施したが、他意はなく、単に、受講学生が比較的にとまっているので回収に容易であると考えたからである。実施者数と回収比率など表4に示す。

##### 4-1 アンケートの結果

- ①入館 図1 各専攻別、学年別に月平均入館日数を示す。
- ②貸出 図2 // // 月平均貸出冊数を示す。

(注) 図に示す比率(度数)は学年毎の専攻別回答者を各々、100%として、入館、貸出状況を示したもので、回答者総数157人に対する比率ではない。

- ③図書充足度 図3 学習図書、教養図書、研究図書及び雑誌について、蔵書に対する充足度を問うたもので、不足、普通、十分という3段階の感想を各専攻別、学年別の回答者を100%として、分布を示したものの。

表3

図書館に関するアンケート

S60-9-□  
専攻□□□, □□年

1. 図書館利用調査

1・1 月平均入館日数 0, 1, 2, 3, 4, 5以上

1・2 月平均貸出冊数 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6~10, 11以上

2. 図書(美術書, 学譜を含む)蔵書について

2・1 学習用図書の蔵書充足度 不足 ・ 普通 ・ 十分

2・2 教養 " " 不足 ・ 普通 ・ 十分

2・3 研究用 " " 不足 ・ 普通 ・ 十分

2・4 雑誌 " " 不足 ・ 普通 ・ 十分

3. 短期大学図書として, 欲しい本, 読みたい本, 見たい本等どのような図書を, より充実すべきかで意見があればお聞かせ下さい。

4. 図書館全般について, ご意見があればお聞かせ下さい。

4・1 設備上の改善要望事項(閲覧室, 机, 照明, 騒音等)

4・2 開館日時, 貸出冊数等

4・3 試聴室, 視覚室等

5. 学生の希望図書購入制度がある事を

知っている。 知らなかった。

アンケート 実施状況

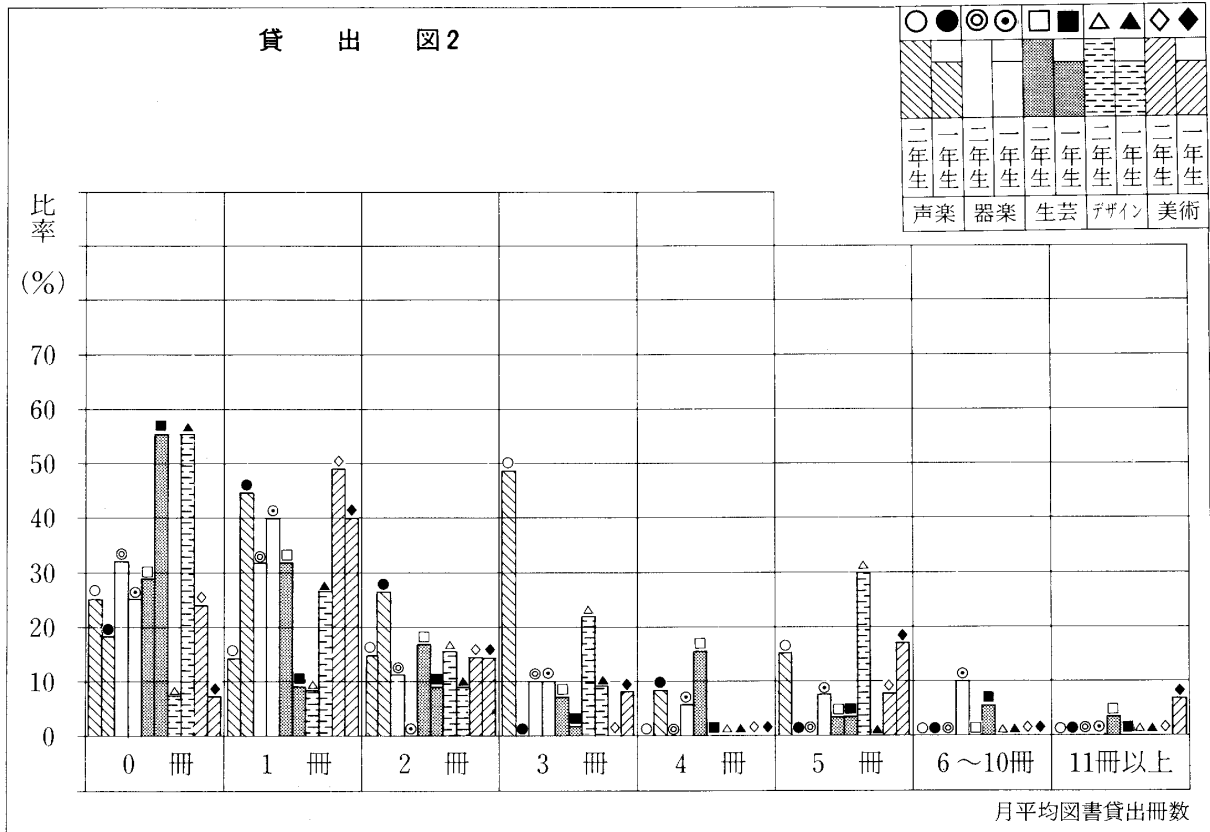
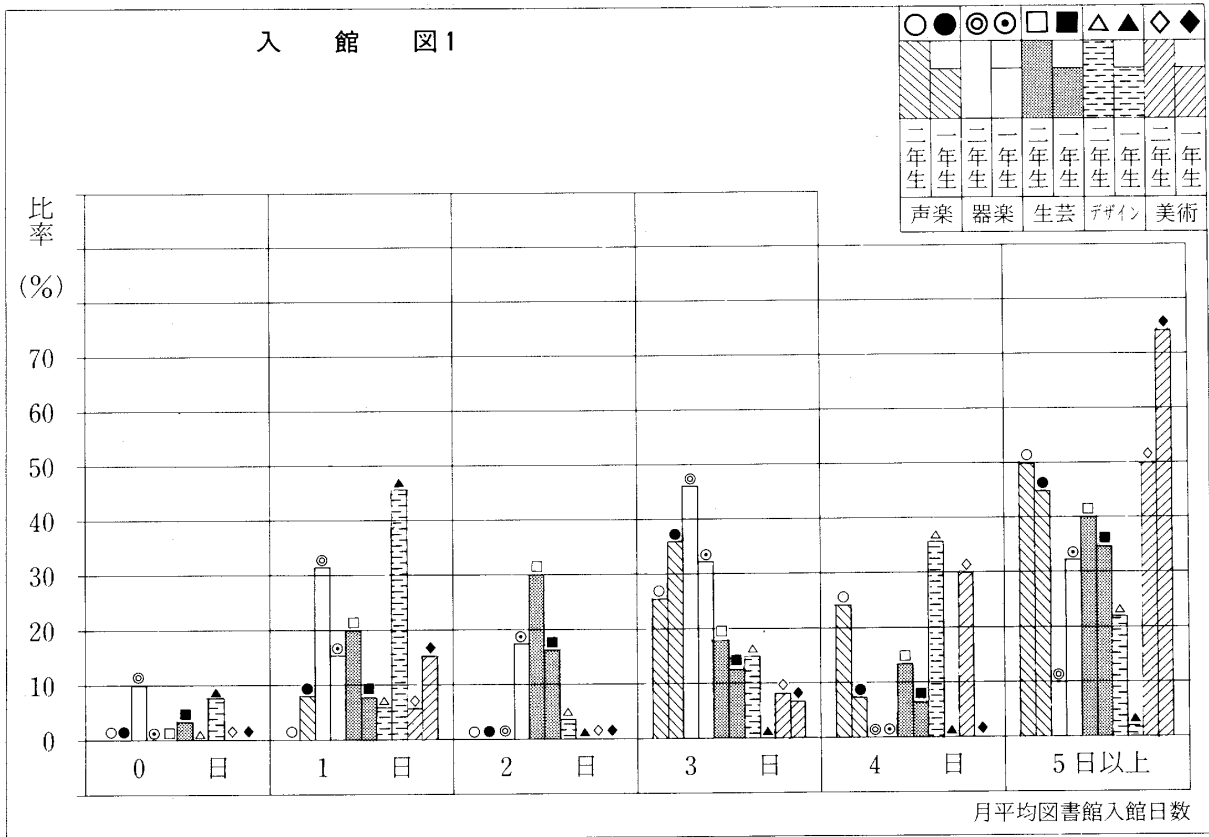
表4

	在学学生者数	アンケート学生数	回収者数	回収比率
2年生	191名	153名	72名	47%
1年生	190名	177名	85名	48%
計	381名	330名	157名	47.5%

(注) 各専攻別, 学年別の回収者数(回収比率)

1年生 声楽11(44), 器楽19(54), 生活芸術31(44), デザイン11(44), 美術13(62)

2年生 " 8(22), " 9(31), " 30(50), " 13(93), " 12(92)



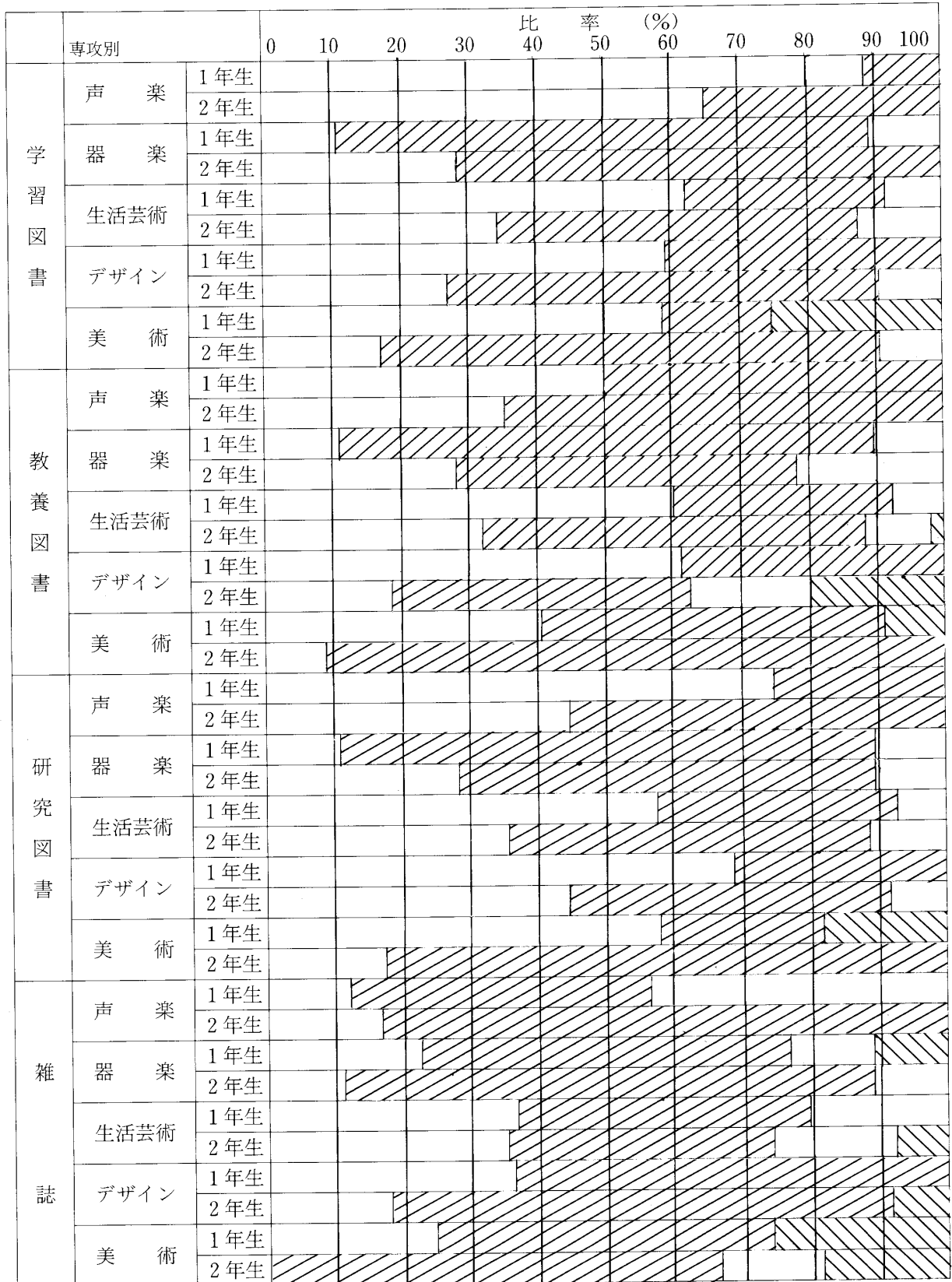
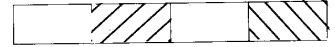
短大教育における図書館の活用

図書充足度アンケート

図3

—専攻別—

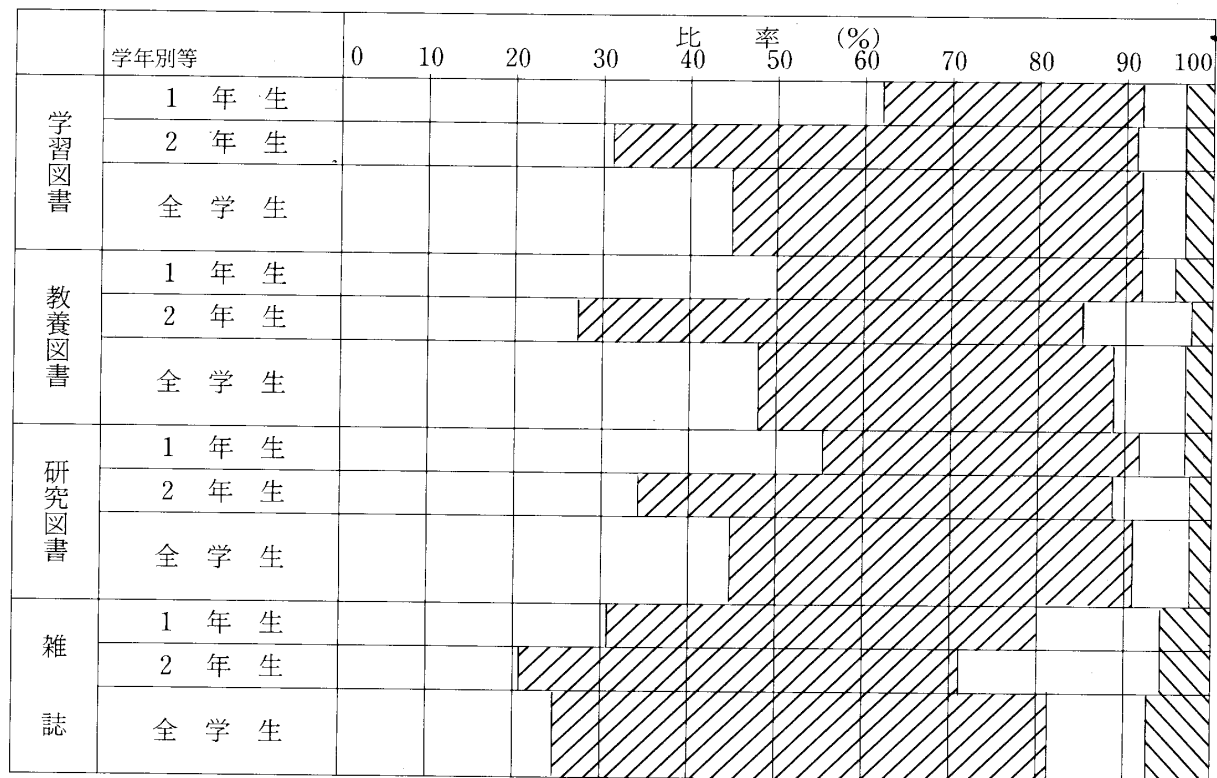
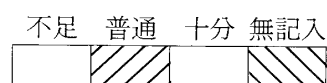
不足 普通 十分 無記入



図書充足度アンケート

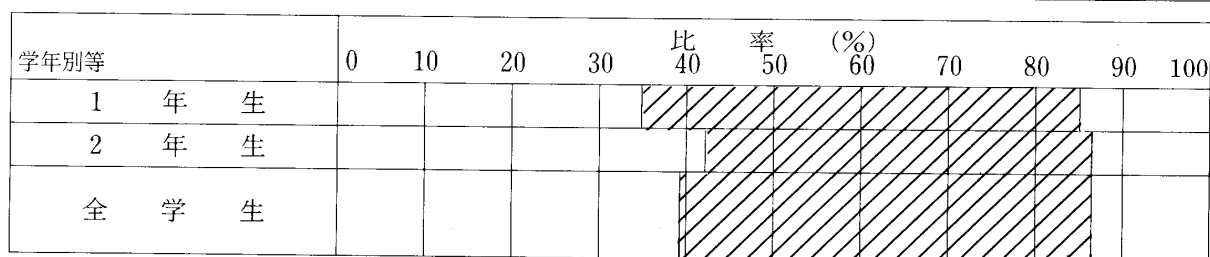
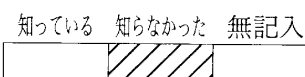
図 4

—学年別等—



学生の希望図書購入制度アンケート

図 5



④ // 図 4 図 3 において、学年別、全学生別に分布を示したもの。

⑤ 学生の希望図書購入制度 図 5 当購入制度を調査時に (59年 9 月) 知っているか、否かを学年別、全学生別に分布を図示したもの。

4-2 アンケートの考察

① 1ヶ月平均で、1度も入館していない人が若干名いるが、比較的図書館は利用されている。(注、入館していない人：3人/157人 (2%)、5日以上入館している人が60人/157人 (38%))



②貸出冊数をみると、月平均貸出冊数0の人が、50人/157人(32%)は多い様である。これは高価な美術図書などが禁帯出になっており、その関係があるかもしれない。

③学習、教養、研究用各図書蔵書に対して、各専攻別、学年別で差があるが全学生レベルで見れば、略半数の学生が不足とみている。但し、器楽専攻の学生は蔵書に対して普通という学生が多い。

④雑誌については、蔵書不足は少なく、普通という学生が多い。

⑤学生の希望図書購入制度については、知らなかった(48%)が知っていた(39%)をオーバーしており、入学時のオリエンテーションのみでは周知徹底しないことを示している。

⑥図書に関する自由意見

全回答者(157人)中、購入希望図書については52人/157人(33%)の記載があったが、その主なものを列記すると次の通りである。但し、具体的な固有名詞で示す書籍の意見はなかった。

- |             |             |                 |
|-------------|-------------|-----------------|
| ●最近の画家の画集   | ●動植物に関するもの  | ●声楽の本           |
| ●彫刻家の専門図書   | ●授業に参考になるもの | ●文学             |
| ●現代作家のイラスト集 | ●教養図書       | ●自然科学に関するもの     |
| ●グラフィック     | ●文庫本、小説など   | ●新しい情報に関するもの    |
| ●レタリング      | ●詩集         | ●仏語の参考書をふやしてほしい |

⑦図書館全般、設備、開閉時間、制度、試験室、視覚室等に関する自由意見

本件に関して、次の様な意見があった。

㊶開閉時間に関するもの22人/157人(14%)

開館時間を早く、あるいは閉館時間を6時又は7時までの意見、18人、土(午後)、日曜日の開館など4人。

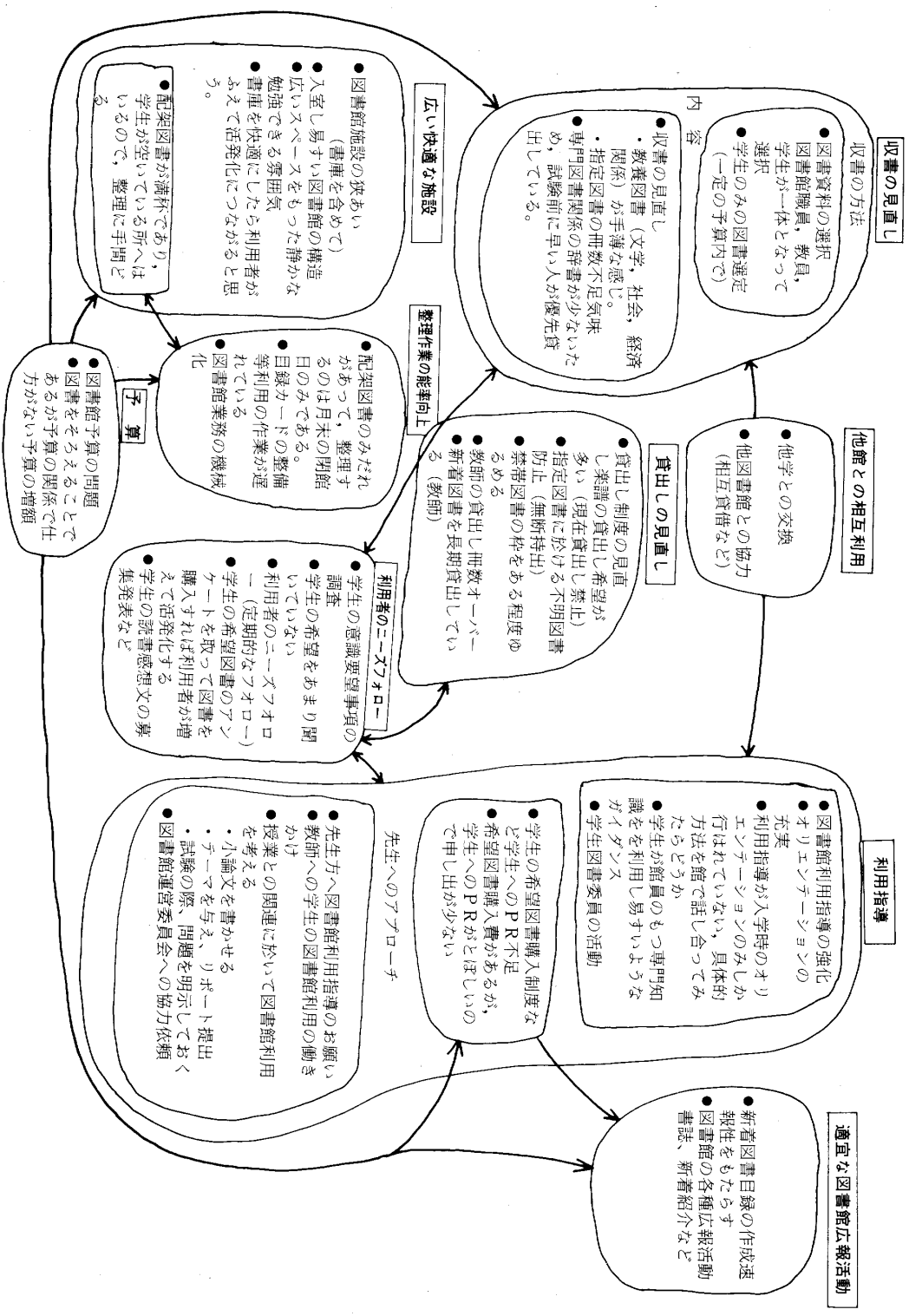
㊷施設に関しては5人/157人(3%)で、照明について(階段、書庫が暗い)2人、冷房について、もう少し快適にという意見が3人。

㊸制度については貸出期間を2週間の意見、貸出冊数をふやしてほしいとの意見が各々1人で、その他制度に関しての意見は見られなかった。(現行の貸出期間は1週間、手続により更に1週間毎の2回の延長可)

## 5 公立短期大学図書館協議会九州地区会議の討議より

S.60年9月5/6日開催された13回会議において、本学が当番館で、種々有益な討議がなされたが、その中で「図書館活動の活発化への対応策」について、参加4大学(福岡社会保育短大、長崎県立女子短大、鹿児島県立短大と本学)、9名の方々によるKJ法による提案メモ(表5)が提起された。KJ法はご承知の通り、文化人類学者である川喜田二郎氏がS.40年代に発表した発想手法で、最近でも小集団活動における改善活動や製品開発などのアイデア提案にも活用されている。今回の提案メモに関しては各短大図書館の事情の相異もあるが、今後更に展開し、図書館の活動を活発化していくことになった。本学でも本文に述べた図書選択、利用把握など教師の方々へお願いするなかで推進できればと願っている。

図書館活動の活発化への対応策——KJ法による提案メモ 表 5



## 6 結 び

①短大では教師が図書選択（収書）について、かかわりを持ち、リードすることが必要である。収書如何が図書館を信頼性あるものに育てる一歩であり、教師の協力なしでは教育上有効な収書はできない。

②図書館資料の利用把握が特に必要である。短大における2年間という時間制約があるなかで、自主的学習、研究能力の育成を図書館活用に期待するとき、その利用把握は教師にとっても無関心ではいられない事項であり、自主的活動の動機づけと共に教育効果向上に反映させる手段の一つになりうると考える。

③これら、収書～図書利用把握～教育の Plan, Do, See の有効なるシステム形成には図書館の事務機械化が必要である。

④学生のアンケートより、月平均入館日数が比較的多いことなどを含め図書館はよく利用されていると考えるが、さらに利用者にとって、よりよき図書館へ育成のためにも皆様方のご意見、ご批判を賜りたい。

## 文 献

- (1)山本 芳枝；短期大学図書館における利用指導について。一本館での実践をふまえて—  
長崎県立女子短大
- (2)長沢 千恵；図書館の教育利用について。—アンケート調査分析を中心に—  
短期大学図書館研究第4号，1983
- (3)漢那 ；短大生の図書館利用と読書傾向。—沖縄キリスト教短大図書館の1978～1980年度の  
利用実態に基づいて。 短期大学図書館研究第3号，1982
- (4)五十嵐絹子；文献にみる最近10年間の学生の図書館利用に関する調査。—アンケート調査  
伴野 安江 を中心に一。 短期大学図書館研究第3号，1982
- (5)安部叁己 ；短期大学図書館の新しい役割を考える。  
短期大学図書館研究第3号，1982
- (6)公立短期大学図書館協議会；公立短期大学図書館改善要項，1978
- (7)宮腰 賢；大学生の読書実態をみる「全国大学生生活協同組合連合会—大学生の読書生活—」よ  
り  
世界5月号，S60年